白石草(しらいしはじめ)さん 仙台講演会、今後の予定など

11月30日(土) 13:30~16:00 仙台市市民活動サポートセンターにて

東京電力福島第一原発事故発生より8年半過ぎた現在、福島県では、事故当時18才以下だった230名もの方が甲状腺がん・悪性疑いと診断されています。また、本年5月の河北新報社の報道によると、丸森町が



会 場: 仙台市市民活動サポートセンター BIF 市民活動シアター (青業区一番町四丁目1-3) 主 催: 日本キリスト教団東北教区放射能問題支援対策室いずみ お問い合わせ: 022-796-5272 (平日10~16時)。または、izumi@tohoku.ucci.jp 町民(震災当時18才以下)を対象としている検査においても、計4名の方が甲状腺がんと診断されています。

メディアリテラシーの観点から、今何が 起きているのか。そして、市民・住民の立 場から、福島県などの調査を検証するため に、ジャーナリストの白石草(しらいしは じめ)さんによる講演会を仙台市内で開催 いたします。わかりやすく、詳しく、白石 さんにお話しいただきます。

子どもたちのためにできることをご一緒 に考えていきましょう。ご参加お待ちして います。

甲状腺検査の予定 (詳しくはいずみHPをご覧ください)

甲状腺エコー検査 in 仙台市 11月16日(土) 於:仙台市青葉区「エマオ」

甲状腺エコー検査 in 角田市 12月21日(土) 於: 角田市「市民センター」

「いずみ」の活動は国内外の支援活動によって支えられています。この活動を続けていくためにみなさまのご支援、ご協力をお願いいたします。献金、ご支援は下記専用口座をご使用下さい。

ご支援のお願い

送金先金融機関 ゆうちょ銀行

口座番号 02270-2-114887

加入者名 いずみの会

通信欄に 会費(一口2000円から)、又は、献金(支援)とお書き下さい。

運営委員長 布田秀治(いずみ愛泉教会)

運営委員 明石義信(常磐教会) 鈴木のぞみ(川俣教会)

寺田 進(原町教会) 保科 降(福島教会)

布田秀治(いずみ愛泉教会)

室 長 保科 隆(福島教会)

顧問 篠原弘典(原子核工学専攻)

スタッフ 会津かよ子 笠松絹子 服部賢治

会計協力 渡辺広衛

日本キリスト教団東北教区 放射能問題支援対策室いずみ

UCCJ Tohoku District Nuclear Disaster Relief Task Force "IZUMI"

〒980-0012 仙台市青葉区錦町1丁目13-6

TEL/FAX 022-796-5272 メールアドレス izumi@tohoku,ucci,jp

12

ホームページ http://tohoku.uccj.jp/izumi/

日本キリスト教団東北教区放射能問題支援対策室いずみ ニュースレター第13号 2019年10月29日発行



題字 丹治正雄氏

「規模は縮小、しかし活動は変わりなく~さまざまな課題の中で~」

東北教区放射能問題支援対策室いずみ 運営委員長 布田 秀治

東北教区放射能問題支援対策室いずみ(「いずみ」と以下略記)は設立から7年目を順調に活動できています。いつも全国の諸教区・教会からいずみの働きを覚え、暖かくお支えいただいておりますことを感謝致します。おかげさまでいずみは今年度から、新しい体制を整え、規模は縮小しましたが、活動はこれまで同様に進めたいと頑張っています。

主な活動である甲状腺検査では、今年に入って少し心配な状況が起こっています。それは、昨年B判定が1名だったのに対し、今年半年間で11名に増えているということです。また、A1判定が106名に対し、A2が134名となっています。しかし福島県では甲状腺検査が縮小に向かっています。このような中で、いずみの働きはこれからますます重要性を増していくと思っています。

長距離保養は年一回の実施になっています。今年は3月に奄美大島で7家族21名の参加がありました。来春沖縄を予定しています。このような中、北海教区が今夏新しい試みとして、保養要望者に対し、北海教区が主催し、いずみが共催する形で5組16名を受け入れてくださいました。このような企画がいろいろな所に広がっていくと嬉しいです。

今年10月3日、福島県議会が「自主避難者5世帯に、退去と賃貸料金支払いを求めて提訴する」議案を可決しました。原発事故避難指示区域外から東京都江東区内にある国家公務員宿舎に避難している人たちに対してです。自主避難しなくても良い環境がどれだけ整えられているのでしょうか。また、東北電力は女川原子力発電所を再稼働させようとしています。宮城県知事と県議会は11万人を超える県民による住民投票の意見表明に、どう真摯に向き合って判断されるか注視していかなければなりません。そして、オリンピックの競技のいくつかが「福島」で開催されようとしています。土壌汚染が依然として高く、放射性微粒子による内部被曝の危険性が指摘されています。一過性のお祭りや「復興」アピールだけに終始するのではなく、放射線リスクと丁寧に向き合っていくことこそが求められることではないでしょうか。いずみはこれらの課題に向き合いながら歩んで行こうと考えています。

最後に、教会、地区などの集会でいずみの活動報告をする機会を作っていただきたいと願っています。小さな集会でも声をかけてくださいましたら喜んで伺わせていただきます。 よろしくお願いいたします。

新しくいずみ運営委員に選任されて 福島県南相馬市 原町教会 寺田 進(てらだすすむ)

「いずみ」運営委員の一人に選ばれての思い

読者の皆様に平和がありますように。このたび「いずみ」運営委員に選出された寺田です。4月に東京教区の教会から原発被災地と呼ばれている福島県相双地方にある原町教会の牧師として赴任しました。こちらは東京電力福島第一原発から24.5kmという距離にあります。凡庸非力な私がそのような教会に遣わされたことは神に遣わされたとしか考えられず、畏れと感謝をもって受け止めています。また、全国の兄弟姉妹皆様に熱く切なる祈りと多大なるお支えをいただきながら震災後8年半を迎えられておりますことに深く感謝を申し上げます。

私自身の東京での東日本大震災と原発事故当時のことを申しますと、激甚な津波被害の映像とメルトダウンによって国土と社会、世界崩壊の気配に、個人的にはその過酷さが受け止め難く抑うつ傾向となり、

放射能被曝について東京の生活のために東北の皆様を苦しめてしまった負い目をどうお返しすべきか、どうしたらいいのか思い悩みましたが、CSの若きリーダーが「こんなとき教会が祈らないでどうするのか」という声を上げ、それ以来8年間、教会では「被災地の祈り」と題して主日ごとに神に祈り続けました。被災教会、伝道所や学校に電話で祈りの課題を分けていただき、たとえつたなくても共なる祈りを重ねました。附属施設の幼稚園では、園長として除染をしながら園児の安全と保護者の安心を取りつけようと困難を極めていました。初期被曝以上に被曝することを拒否して遠くへ避難した家族もありました。昨年度まで定点で園舎、園庭で空間放射線量を測り続けました。



福島第一原発に近い教会とこども園に遣わされて

2011年3月11日14:46地震発生。15:15相双地方に津波到達。19:03原子力緊急事態宣言発令。21:23東京電力第一原発から半径3㎞圏内の避難指示。12日(土)15:36、1号機水素爆発。18:25避難指示は半径20㎞圏内まで広げられ、14日(月)11:01、3号機水素爆発。15日(火)6:00頃2号機、4号機にも大きな爆発音があり、11:00半径20㎞~30㎞に屋内退避指示発令。自主避難指示・県内飛行禁止区域となり、20日、25日までバスでの集団避難を誘導された。私たちの教会とこども園はそのような場所にあります。その後、4月22日より半径20㎞圏内は警戒区域に設定され、立ち入り制限となり、わたしたちの

半径20km~30km圏内は9月30日まで緊急時避難準備区域に設定されました。難しい言葉ですが、要するに、「こども、妊婦、要介護者、入院患者は立ち入らない、幼稚園保育園は休園、小・中・高校は休校」となりました。8月には南相馬市の除染強化月間があり、9月30日に緊急時避難準備区域指定は解除されました(避難指示等の名称は当時のもの)。

相双地方は美しい海岸線と干拓地の美田が南北に長く続く 地帯でしたが、大地震・大津波・放射能被曝のいわゆる三重 苦の被害を蒙りました。南相馬市の人口は7万人から5万人に 減りました。





今、初めて私の住む町に来られる方には何の変哲もない長閑で静かな所と思われるかもしれません。いいえ、それは多くの除染に従事する方々が去られたからです。町にこどもたちの声が聞こえず姿が見えないのは屋外で遊ばない遊ばせなくなったからです。町中心部にある公園や校庭や田畑レコンが撤去されつつあります。我しても66袋を2月に園庭土中から撤去していただきました。園庭や町のエリが同ても66袋を2月に園庭中から撤去していただきました。園庭や町のエリが記してもるに自いモニタリングポストは立っにます。隣の美しい草原の公園に行くのにも

放射能の影響を不安に思って取りやめる方もいらっしゃいます。近くに海水浴場がいくつもありましたが 破壊されてしまい、今のこどもたちは海に行ったこともなければ波の絵も描けません。ようやく今夏、 近くの浜で市内初の海開きがありました。園や学校食材は勿論、毎日放射能測定を続けています。

低線量被曝の不安、それを隠そうと無意識に来るストレス。感覚の違いによる人付き合いのストレス。会話の中で時に噴出する傷ついた感情の高ぶり、なんでもないのだと思いたい、思っていいのかという 葛藤。原発事故処理や裁判への思いも住民に隠された心の垣根を作っています。東北電力の原発建設計画をこの事故によって 中止した浪江町、南相馬市小高区の住民の皆様の感情も複雑でいらっしゃることと思います。全国の皆様は双葉町、大熊町の現状をどうご覧になっているでしょうか。

「いずみ」の働きと皆様のご支援を感謝して

さて、今も、東日本大震災により約5万人が避難、県外避難者は福島県だけで3万人強の方々が避難生活を送られています。現在、東京での自主避難者が話題になっています。世界の皆様、残念ながら日本は原子力緊急事態宣言発令中なのです。状況は完全にコントロールされている、の名台詞ははるか2013年のこと、いよいよ天皇代替わりを経て、復興五輪が開催されます。

愛のない声高な声と力に柔和な静かなる真実の声はかき消されそうですが決して負けないと思います(イザヤ42章)。私たち自身、悔い改めて立ち返り前を向くしかありません。そうした中、「いずみ」の訪問と傾聴、保養プログラム、健康相談と検診の働きを続けさせていただきたいです。



写真は原町教会ホームページより(フレコンバック除く)

寄稿 宮城県内各地から「子どもたちへの想い。見えない放射能と向き合い、不安を乗り越えていくために。」

前々号(2018年9月29日発行)に続き、「いずみ」が実施する甲状腺エコー検査会を各地でご協力くださる方、 また、受検された保護者、計3名の感想をご紹介いたします。

「いずみ 甲状腺検査 in名取」 仙台市 A.N.



6月29日、名取教会を会場に甲状腺検査が行われました。検査前、当日の 事務作業に人手が必要とのことでいずみの服部さんが声を掛けてくださり、 私と5歳の子どもは受検を兼ねて初めて伺うことになりました。

当日は梅雨の時期で朝から肌寒く雨も降っていましたが、会場に着くとスタッフの方々や名取教会の荒井先生ご家族が温かく迎えてくださいました。この日は70名程の方が検査に来られる予定で、予約の時間に合わせて次々と人が訪れました。

私も空いている時間に検査を受けさせてもらいました。ベッドに横になり、天井を見ながら喉にエコーの機械をあててもらい担当医師の寺澤先生のお話を伺いました。幸い甲状腺に問題はなく、痛みや緊張感もなく、2~3分くらいで終了しました。

これまで身体の甲状腺を意識したことがなかったので、エコー写真を見てもなかなか想像できませんでしたが、甲状腺は成長期にホルモンを出す臓器で、背が高くなりたい人は成長期に夜は早く寝て睡眠をしっかりとることが大切、というお話を伺い子どもに伝えていきたいと思いました。

検査中は放射能の恐ろしさや甲状腺の病気に触れて重い空気になるのかな、と想像していましたが、 穏やかな雰囲気の中で甲状腺のお話を聞くことができました。忙しい現代で軽視されがちな「眠ること」 だったり、「休む」ことが人にとってどれほど大切なのか考えさせられました。

子どもは普段から病院が苦手で、私の検査の様子を見ながらもなかなか検査のベッドに上がることができませんでした。ジタバタ動いてしまうと検査は難しいようで、この日は受けられませんでした。原発事故から8年過ぎ、今は7歳から27歳の方が検査の対象年齢ですが、以前はさらに低年齢のお子さんたちが対象だったのですから、小さい子が怖がらないで検査を受けてもらうことに力を注がれていたのではと想像します。

子どものための検査だと思っていましたが、20代の方が保護者の付き添いなくお一人で来られていて時の流れを感じました。 甲状腺に少しでも心配ある方はもちろんですが、宮城県内でも 多くの人が継続して受けることが必要だと思います。



福島の原発事故から時間が経過して、仙台でも周りのお母さん同士でも話題にしにくい雰囲気が実感としてあります。しかし、今も、県内外で採取される山菜や野生動物からは基準値以上のセシウムが検出されたり、子どもが大好きな土遊びなど、土壌汚染がなくなった訳ではなく心配です。食べるものや子どもたちの遊び場も自分なりに調べたり考え続けていかなければと思います。

「いずみ」のスタッフの皆さんの地道で丁寧なお働きにいつも感謝しています。この活動が長く続けられますように祈るばかりです。この度は貴重な機会を与えて頂きありがとうございました。

2019年9月19日記

「安心を積み重ねていきましょう」

子どもの健康を考える会・いしのまき 長沼 利枝(石巻市)

「日本キリスト教団東北教区放射能問題支援対策室いずみ」による甲状腺エコー検査は2013年12月から始まり、2018年末にはその回数は57回、受診者はのべ3000人を数えるという。

『子どもの健康を考える会・いしのまき』は、子どもたちとその家族に寄り添い、その中で積み重ねられた見地に満ちたスタッフのお力添えのもと、2018年5月と12月の2回、実施することができた。スタッフの皆さんは受診者の緊張を和らげ、放射能の健康影響を慎重に、長期的に親御さんと共に子どもたちに寄り添い、さらにはそういう社会でありたいという決意と覚悟をももっておられた。



私たちは「安心を積み重ねていきましょう」と愛情をこめて、この検査会の愛称を「じょっこ検査」と 決めた。(※編集注:じょっこ=石巻地方の方言で「かわいいこども」という意味)

2017年7月、石巻市主催で、市内にある放射能汚染廃棄物を焼却処分すると市長も参加して説明会が開催された。説明会後、すぐ立ち上がったのは「子どもたちの健康は大丈夫なの?」と心配した若い父母、豊かな自然の中で農業を生業とする人々、真実を知りたいと願う人々だった。そして、「放射能汚染廃棄物処分を考える河南の会」が立ち上がった。

震災時、石巻市半島部の避難所では「震災前から利用していた湧水を飲んだ。原発の爆発でどうなるか、いくらかの知識はあった」と女川原発建設にも反対したと年配の女性が話した。膨大な震災瓦礫の一部を九州の自治体が焼却処分に応じてくれたとき、「放射能廃棄物を持って来るな」とピケを張り阻止する人々のことが記事になっていた。さらに近くの山は放射能汚染のため牛の放牧を見合わせていたが土壌のすき込みをして放牧を再開した。この説明会でそういったことが思い出され、わが身に詰め寄った。工業港に臨時の焼却炉が建設され震災瓦礫が焼却され、焼却灰が1万5千トン余り埋め立てられたことも最近になって知った。そういう事がいくつも重なった。

5

「いずみ」との出会いもあり、子どもの健康を考えるためには会が必要だと時期を違えず問題意識を持つ仲間が集まった。一人は我が子に何を食べさせ、何を教えていくのか、何が真実なのかを見極め、若い親同士の出会いを力に変え日々過ごしていた。一人は、放射能汚染検査を通じて震災直後の人々の苦悩に今一度寄り添おうと奮闘していた。私たちは2011.3.11以後、放射能と向き合わざるを得ない時代の来し方行く末をつなぐ一員として、検査会と子どもたちと結びつけ、子どもたち自身が時代に向き合い力強く生きていってほしいと願っている。大人も最善を尽くしたい。



2019年1月11日記

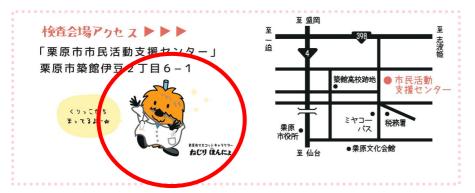
寄稿宮城県内各地から

放射能から子どもたちを守る栗原ネットワーク 代表 鈴木 健三 (栗原市)

2019年(平成31年)3月16日(土)、日本キリスト教団東北教区放射能問題支援対策室いずみ様に栗原地区(栗原市)で第3回目の甲状腺検査をして頂き、本当にありがとうございました。

事務局長の服部賢治様には、何度も栗原市築館に足を運び、準備をして頂き、お陰様で甲状腺検査を成功させることができました。

特に、今回は栗原市のシンボルマーク、 "ねじりほんにょ" をチラシに入れて欲しいと要望を市にしましたら了解されました。続けて、甲状腺検査の期日を市民にご案内をしたいとお話しました。市よりそれも了承してもらい、広報に2回掲示して市民に知らせてもらいました。このことは、栗原ネットワークでは初めてのことで嬉しくて取り組みにも力が入りました。



2019年 3月16日

栗原市での検査チラシ・

うら面より

栗原市マスコットキャラクター

「ねじりほんにょ」

当日は、寺澤政彦院長先生はじめ、スタッフの皆さんのあたたかい対応に、参加者は安心して、しっかり検診して頂きました。また、顧問の篠原弘典様には、保護者の方々のご相談を納得できるまでお話を頂きました。本当にありがとうございました。

参加者は48人でした。毎日新聞(2019年4月5日)では当日の甲状腺検査を写真入りで紹介しました。

これから、甲状腺検査は5年間継続して行うとお話を頂きました。私たち栗原ネットワークでは、これからも検査をお願いいたします。また、5年間のうちに、市とお話や勉強会を通して、市が中心となって甲状腺検査等ができるように、働きかけをしていくことが大切と思っております。

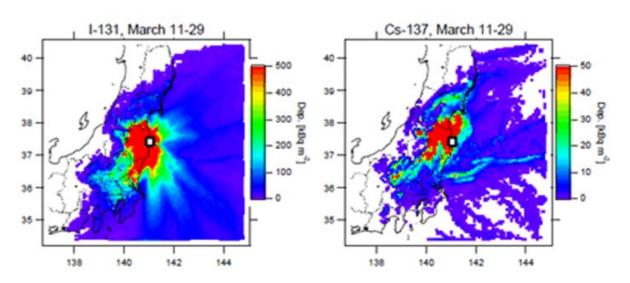
2019年5月9日記





【開催報告】5/18 甲状腺エコー検査 公開報告・交流会

福島県と異なり、宮城県内では放射能に関する公的な健康調査が行われておりません。それでもなお、被ばくした子ども・住民への配慮から、甲状腺への影響を確認するエコー検査を実施している関係者がつどい、報告や交流会を行いました。(プログラムについては11ページ下部参照)



2011年3月11日~同29日までの、福島原発事故によるヨウ素131とセシウム137の積算沈着量マップ。 (国立環境研究所による大気輸送沈着シュミレーションより)

上図のように、宮城県内においても、事故当初の放射能拡散・汚染による晩発性の健康影響が懸念され、国や行政による健康調査の取り組みは県南の丸森町が独自に実施しているのを除いて、民間団体などが希望者を対象に自主的な検査活動を行ってきました。

2013年12月に第一回の甲状腺エコー検査会を開始して以降、いずみでは、複数医師や医療機関のご協力を得て、のべ3000名を超える検査を実施してきました。そして、2019年5月18日(土)、仙台市の「エマオ」にて、検査活動に取り組む県内関係者がつどい、2018年度の検査結果を中心に報告や、公開での意見交換や交流の時間を持ちました。

いずみからは、2018年度、594名の甲状腺エコー検査を行ったことをご報告しました。

東日本の1都15県に在住する甲状腺がん患者を支援している、NPO法人「3.11甲状腺がん子ども基金」 事務局長の脇ゆうりかさんからは、福島県外からも、甲状腺がんと診断された、震災当時18才以下の 当事者、もしくは家族からの支援を求める申請にこたえ、宮城県内では5名の甲状腺がん患者を経済的、 精神的にサポートしていることのご報告をいただきました。

医師の山崎知行先生(上岩出診療所・和歌山県)からは、一定以上の汚染が確認されたチェルノブイリ被災地では事故から33年たった今も、国が責任をもって住民や子どもたちへの検診機会を提供、大規模な調査が続けられ、今も受診率は高く、住民の信頼が高く寄せられていること。

寺澤政彦先生(てらさわ小児科・宮城県)は、いずみの検査ではたまたま見つかっていないけれども、 ご自身の臨床経験から、大きな結節を保有する方、有所見者が観察されたケースを紹介されたり、逆に、 甲状腺疾患が自然治癒したケースなど、時間をかけ、長期的に、慎重に検査活動を続けていく 必要性や意義について言及されました。

【開催報告】5/18 甲状腺エコー検査 公開報告・交流会 in エマオ

子どもたちを放射能から守りたい。

宮城県内で取り組む、いずみと、民間6団体が意見交換・交流。

第二部では、県内6団体が意見表明し、交流の時間を持ちました。

宮城県内では、原発事故後の2012年、全県的な請願活動「子どもたちと妊産婦を放射能から守るための体制の確立を求める」請願(提出団体:子どもたちと妊産婦を放射能から守る宮城県連絡会※)が、宮城県議会において全会一致で可決されたにもかかわらず、県が受けとめなかったため、放射能と健康影響についての科学・疫学的な実態調査や検証が何らなされていません。※http://kodomomiyagi.blog.fc2.com/blog-entry-128.html

事故当初から現在まで、国や宮城県、各自治体の放射能対策と、住民・市民が求める対策に大きな乖離(かいり)があり、甲状腺や健康状態を把握する取り組みを民間団体や一部医療機関などが取り組んできました。

いずみが実施する検査会にご協力いただいている県内各地の5団体と、いずみとは別に、独自の検査活動を取り組んでいる 1団体(かたつむりの会)の計6団体が、この間の取り組みの報告・成果を述べ、それぞれの課題などを分かちあいました。 以下、第二部での各団体からの主な発題を、箇条書き的にご紹介します。

子どもを持つ親として、宮城県内で放射能に関する健康調査が行われていないことは不安だ。

放射能汚染は大したことないように伝えられているが、汚染牧草などがあることや、身の回りの土や掃除機のほこりなどの放射能を測定、数値化してみると実際は高いことがわかった。放射能に関する子どもたちへの検査があればいいな、と思った。

震災当時、子どもたちに何を食べさせたら良いのかわからず、国よりも低い基準値を設け、独自に放射能検査をはじめた販売業者の食品を選ぶことで被ばく低減を意識的に、継続して選択してきた。

なぜ、教会が取り組むのか。核利用は自然や神さまの作った世界からはみ出たもの。いずみの働きは普段教会に来られない 方々や社会とつながりが深い。それを支えることは教会にとっても大切だと思う。

単独ではできないけれども、いずみと互いに補うことで検査会を実施することができる。

いざ検査会の日を迎えると近所の親子や子どものクラスメートが来てくれた。信頼関係やつながりが大切だと思った。

検査会の広報について自治体や教育関係者への働きかけを通して協力をいただくことの意義は大きい。今後はより協力を 得ていきたい。

測ってないからわからない、知らないだけ。環境放射能を測定していると汚染は低いとはいえない。福島だけの問題ではない。

子どもが大きくなると受けなくなる傾向があるが、震災当時、野外で遊んだり、部活をしていたような世代の子どもたちは今、高校、大学、社会人に成長している。そういった世代へのアプローチが課題。

同居している祖父母などに「受ける必要ない」、と反対されている父母がいるようだが、学校などで検査チラシが配布されると、 保護者にとっては受検についてのハードルが下がる。

本来は行政が検査会を後援してほしい。後援している自治体もある。しかし、×〇町では県の方針(検査の必要はない)を 踏襲している、という。観光や農業を主な産業とする町では独自に健康調査を行うことは難しいようだ。

各地で顔の見える市民・住民が取り組んでいることで、不安を覚える親子は安心感や信頼感をもって検査会に来てくれたり、 子どもたちの健康や成長を見守る体制作りが相互補完的に構築されてきている。

検査を行うことで、具体的な根拠をもって判断できること。また、信頼できる情報や材料を蓄積することによって不安を打ち消したり、軽減できる。

一方、検査を一度受けて安心し、それっきり受けようとしない方が一定いるようだ。この検査は継続して受けていくこと、 そして、最新の知見を含めて検査についての理解を深めていくことが必要だ。

8

子どもたちのため よる健 わ ぼ たち自身が放 C な ば 射 何 も う か らな



時間が経つにつれ、放射能と健康とのかかわりについての不安を声に出しづらくなっている。フタをされていくように感じる。しかしながら、検診の場がある(つくる)ことで、普段は胸にしまっている不安などを言葉にしたり、共感しあうことができる。

健康影響についての結論はすぐに出せない。不安に思っている気持ちを出せたり、みんなで分ちあう、一緒に見守っていこうねと確認できる"場"が大事ではないか。

検診での有所見者へのフォローが不十分で、今後検討する必要がある。

そもそも、検査会に参加するような、放射能について関心を持ち、普段から気をつけている方々だけでなく、震災前と変わらないような生活をしている方々にも来てほしい。そのような方々に届く言葉がないだろうか。

各活動団体それぞれで閉じるのでなく、横のつながりをつくる必要がある。

原発事故後、「放射能安全神話」がつくられ、神経質、放射脳など、不安を感じる、

心(個人)の問題にすりかえられています。丁寧な検証や十分な説明もなされない中、

私たち自身が放射能に関する取り組みを継続、深めていく必要性が高まっています。

2019年5月8日 甲状腺検査 公開報告 参加者感想文







「甲状腺検査 公開報告・交流会」に参加して 朝倉 美幸

2019年5月18日、エマオで行われた「甲状腺検査 公開報告・交流会」へ参加しました。

いずみの検査報告、「NPO法人 3·11甲状腺がん子ども基金」脇ゆうりか事務局長のお話をはじめ、

山崎先生や寺澤先生、宮城県内で活動されている市民団体の皆様の活動報告に聞き入りながら、原発 事故から現在に至る迄の自分自身を重ね、当時を思い出しては反芻するような一時でした。

特に、子ども基金の脇さんの報告は、甲状腺がんと診断された子ども達の「今」を 垣間見る貴重なものでした。

現行の小児甲状腺検査は、判定人数や親御さんの気持ちにスポットが当たりがちですが、 検診者である子どもたち一人一人が何を思い、考えているのか?、大人は彼らにどのようにして力になれるか?

私自身が甲状腺検査を手伝う中で常々思い巡らせていたことを、脇さんも今後の課題として捉えておられ、深く共感しました。

又、全ての団体の方々が共通して「コミュニティの重要性」を口にしておられたこと。

原発事故以降、市民測定所や被災者支援団体は全国に数多く生まれましたが、団体同士を繋ぐネット ワークが特になく、 交流の機会も今迄殆ど無かったと思います。

当事者同士が緩やかに繋がること、相互協力し活動を続けていくことは、風化防止、子ども達への継続的支援など、私達が原発事故を克服するために絶対不可欠です。

今後長期化するであろう原発事故による放射能汚染と被曝の問題、その対策の中で"当事者どうしの横の繋がり"の必要を改めて強く感じました。今回の会は、その一助となる有意義なものであったと思います。 今後の継続開催を希望致します。

10

2019年7月3日記

「甲状腺検査 公開報告・交流会」に参加して

かたつむりの会 鴫原 敦子

大変充実した交流会に参加させていただき、ありがとうございました。当日は途中参加となりましたが、私達と同様に福島県外に暮らしながら、原発事故による健康影響への心配から地道な活動を展開されてきた脇さんのお話に、大変勇気づけられました。3・11甲状腺がん子ども基金の給付事業への申請が、福島県外からもあがっていること、そして茨城、千葉、栃木などでも徐々に甲状腺検査を実施する自治体が出てきていることを知りました。また、「いずみ」さんの甲状腺検査活動に関わって



おられる医師達のお話からは、子どもの健康状態をそばで見守る親の思いや検診後の心のケアに至るまで、本当に親身になって考え、市民目線で私達に寄り添ってくださる様子がわかり、とても心強く感じました。

また2部の交流会では、県内各地で同様の思いをもって活動する方々のお話に、共感しきりでした。 震災後の初期対応の要請活動や昨今の放射性廃棄物焼却問題もあり、各地で世代を超えてこの問題に 向き合う場ができてきたことや、「いずみ」さんの活動があったからこそ新しくできた(あるいは活動を再開した)市民グループがあったことも知りました。

検診をせずしての「心のケア」は、本当の安心にはつながりません。現状では、本当の問題が覆い隠され、科学的にまだ未解明なことは「安全」に置き換えられつつ、問題は心のせいにされています。しかも宮城県では「ポスト復興」という言葉さえ語られはじめ、原発事故はあたかも福島だけの問題で、10年で区切りがつくかのような空気が漂い始めています。でも核災害の時間軸はまったく異なるはずです。今後も長く向き合い続けなければならない、むしろこれからの問題でもあることを、私たちは再確認しなければならない時期にきているように思います。今回の集まりを通して、こうした横のつながりをこれからも大切にし、今ここでできることを一緒に考えていきたいと改めて感じました。このような機会を作ってくださった「いずみ」の皆さん、ありがとうございました。

2019年6月13日記

プログラム♪♫

第一部 (公開報告・評価) 宮城県内における放射能汚染状況の説明 2018年度甲状腺検査結果報告

NPO法人「3·11甲状腺がん子ども基金」事務局長・脇ゆうりかさんによる活動報告

山崎知行医師による評価・所感 寺澤政彦医師による評価・所感

第二部 (意見交換・交流) 子どもの健康を考える会・いしのまき 生活協同組合あいコープみやぎ 日本キリスト教団名取教会 3.11後の健康を考える会 (サクラソウの会) 放射能から子どもたちを守る栗原ネットワーク かたつむりの会

